

老健あこうにおける認知症ケアへの取り組み 第2報
～Withコロナにおける創意工夫～

赤穂市立介護老人保健施設老健あこう 認知症ケア委員会
○鍛冶 実、樺林 俊佑、森田 修、濱田 晴美

【背景】

高齢化の進展に伴い認知症高齢者は増加の一途を辿っており、認知症を有する利用者の在宅復帰に難渋するケースが多くなっている。そこで、認知症ケアの質の向上および認知症を有する利用者の在宅復帰率の改善を目的に、令和2年度に認知症ケアワーキンググループを立ち上げ、令和3年度より正式に認知症ケア委員会として活動を展開している。今学会では、これまでの活動（病院マネジメント学会にて報告）に加えWithコロナにおける創意工夫について報告する。

【活動内容】

- 1 行動心理症状が著しい認知症を有する利用者に対して「ひもときシート」を活用しての事例検討の実施
- 2 退所後、在宅生活におけるアンケート調査から施設でのケア方法の振り返りを実施
- 3 見守り支援機器の導入
- 4 オンライン面会の導入
- 5 出前型認知症カフェの開催

【結果と考察】

在宅復帰率は令和元年度と令和2年度を比較すると、令和2年度で低下する結果となった。その要因として、コロナ禍で家族との面会制限を施行したことで家族は本人の様子を知ることが出来なかったこと、また、スタッフ・家族との情報共有の機会が減少し、在宅介護に対する家族の不安を解消することが出来なかったと考える。そこで令和3年度では、コロナ対策に対する県助成金によるiPadの導入および施設Wifi環境を整備しオンライン面会を導入した。これにより、家族からは「本人の元気そうな姿が見れて安心した」などポジティブな声をいただいている。また、遠方で普段の面会や退所前の担当者会議に参加出来なかった家族ともZOOMを使用することでオンラインでの参加が可能となった。

認知症のある方の在宅復帰には地域住民の理解も必要不可欠なため認知症カフェの存在意義は大きいと考えているが、令和2年度はコロナ禍で休止を余儀なくされていた。そこで、令和3年度はこれまで開催していた施設型の認知症カフェから出前型の認知症カフェに変更した（赤穂市役所市民対話課まちづくり係所管の「早かごセミナー」へ登録）。今年度は赤穂市の各地域で開催されている「いきいきサロン」の4グループから応募がありすでに2グループで実施した。これまでの施設型のカフェでは認知症に関心のある特定の方が集まっていたが、開催場所を地域の中で認知症を課題として捉えている場へと展開したことで、よりその地域の実情にあった内容でより多くの方へ認知症の啓発を実施することが出来たと考える。